

明治四十三年七月

史學
研究會
講演集
第三冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會講演集第三冊



目次

哲學の問題……………文學博士 桑木嚴翼……………一頁

國語史上の一疑問……………文學博士 新村出……………三

東國方言沿革考

古姜里城出土龜骨の説明……………富岡謙藏……………三七

我國に傳はれる波斯文に就て……………

……………文學士 羽田亨……………四九

馬場正通の生涯及其の著書……………

……………文學博士 内田銀藏……………二七

附錄 造幣策(馬場正通遺稿)

雜錄

京都沿革に就きていふ話……………田中勘兵衛…二七

本會記事……………二八三

挿圖目次

口 繪 古姜里城出土牛骨……………對頁

第一圖 古姜里城出土龜骨及同背……………二六

第二圖 日本卜用龜骨及鹿骨……………二六

第三圖 波斯文文書……………二六

第四圖 馬場正通書翰(其一)……………二六

第五圖 馬場正通書翰(其二)……………二六

波斯文書

日本に傳はれる波斯文に就て

羽 田 亨

此文書(別掲寫眞版參照)の原本は、南蠻文字の名によりて京都の山田永年氏の藏せらるゝ所なり、蓋し解説の冒頭に、此是南番文字也」とあるによるならむ、もと高山寺の支院方便智院に藏せしが、維新の頃他の多くの寶物とともに世間に流出し、轉輾して山田氏の手に歸したりといふ、地質は鎌倉時代の日本紙にして、毛筆墨汁にて書きたるが如し、曾て久しく京都帝室博物館に出陳せられしも、世の注意をひかず、以て今日に至

れりと、余偶々此寫眞を見て、其南番文字といふものゝ波斯文
(新)なるが如きを思ひ、就て研究を試みしに、全く波斯の詩を記
せるものにして、下方に記せる譯文とは、到底意味の合するも
のに非ざるを知れり、今茲に之を説くもの、もとより史上にし
かく大なる價值を有するが爲には非ず、只だ我が鎌倉時代に
於て、絶域の文字が傳へられ、而して能く今日に之を残すの珍
なるを思ふとともに、之を以て漠然南番文字の名の下に葬り
去りて、人を惑はしむるの愚なるを思ふによるのみ、もとより
余が波斯語に關する知識の如きは極めて淺薄なれば、解釋の
間誤謬の多々なるべきは自から恐るゝ處、而して此詩も、或は
古來彼國に傳へて有名なるものゝ一篇一節なるやも知る可
らざれども、それも亦余の知悉せざる處なり、他日幸に是正と

聞知の機を得て、讀者の寛恕を請はんとす。

文書の左端に記して曰く、爲送遣本朝辨和尚禪庵乞筆之彼和尚殊芳印度之風故也沙門慶政謹記之」と、慶政上人の傳は、本朝高僧傳、元亨釋書以下皆之を載せず、今詳かに知る可らずと雖、西山の法華山寺に住みしよしは、風雅集卷第八冬歌の部に、「雪のいみじくふりたりけるあした、慶政上人西山に住み侍りける庵室に詠みて遣しける」とて、光明峰寺入道道家の、如何ばかり降りつもるらむ思ひやる心と深きみねのしらゆき」なる歌及び、慶政の之に對する返歌あり、また續拾遺集卷十九釋教歌の部に、「慶政上人住み侍りける法花山寺にて人々歌よみ侍りけるに」とて、前内大臣基家の歌もあり、風雅集卷十八釋教歌の部には、慶政自らの歌序に、「式乾門院十三年の法事に法華山

寺にて唐本の一切經供養せられける時、空に音樂の聞えければ、よみ侍りける」といへるが如きによりて知らる、安藤爲章の年山打聞には、閑居の友なる書を以て、松尾澄月房慶政上人作と存候云々の記あり、また和歌國傳源承法眼（古寫本）に、阿房爲相朝臣母安嘉門院越前とて、侍りける身をすて、後奈良の法花寺にすみけり、後に松尾慶政上人のほとりに侍りけるを、源氏物語かゝせんとて、法花寺にて見なれたる人のしるへにて、院大納言典侍二條禪尼もとにきたれり」と記せり、思ふに澄月房とはこの洛西松尾の法花山、即ち今の西芳寺中の一房の名なりしならむ、その生歿の年月も詳かならざれども、明惠上人を始め、道家、實經父子、家長、基家、家隆等の縉紳諸卿と相交はりしことは、續古今、續拾遺、玉葉、風雅、新千載、新拾遺の諸集に、相互贈答の

歌を載するを見れば明かにして、その大概の時代は之を想像するに難からず、三井續灯記には、慶政なる天台の僧を、近江國園城寺の學僧なりとし、能舜法師に師事して經論を學び、西山の法華山寺に居り、文永五年十月六日寂すとあるよし、佛家人名辭書に見ゆ、思ふに此上人のことならんか、かの明惠上人が貞永元年壽六十を以て歿せしに考ふれば、それより三十六年の後、即ち文永五年に此上人の入寂せしは、少しく長壽にすぐるが如きも、然もその交友家長(前出)の如きは文永元年の卒去にして、其間相距ること僅かに四年のみ、されば上人の入宋のことを(後述)頗ぶる壯年の時とすれば、此歿時も未だ必ずしも疑ふ可きに非ざるが如し。

閑居の友二卷(續)群書類從中にも出づは、その著はす所なり

とは、前述の如く爲章の記する所なるも、思ふに正鴻を得たるものに非ず、此書の終に記する所によれば、承久四とせの春やよひの中の頃、西山のみねの方丈の草の庵にて記し終りぬるといひ、また上卷九枚の裏に「此あやしの山の中に身をかくしても八とせの秋を送り來りぬ」といへば、此書の著者が少くとも承久四年(即ち貞應元年)より八年前、即ち建保二年より後は、西山に閑居したる人なるは明かなり、然るに此文書によれば、支那泉州に於て慶政自から記して「爾時大宋嘉定十年丁丑」といへり、嘉定十年は我が朝の建保五年に相當すれば、慶政が建保二年より西山に閑居したりとは見る可らず、従つて閑居の友の著者を此の上人なりとすることも、もとより許すべきに非るなり、此書契冲もすでに慈鎮の作と稱せしこと爲章のい

へるが如くにして(年山打聞)その著者につきては種々論議ありしものなるが如し。

慶政の傳の仔細に知る可らざること前述の如し、されど此文書によりて認め得べき彼が入宋のことは、また疑がふ可らざる事實にして、續古今集卷九離別歌の部に、

慶政上人もろこしへわたりける時つかはしける

從二位 家 隆

厭ふとは照日のもとにきゝしかど唐土迄は思はざりしを

かへし

慶 政 上 人

もろこしも猶すみうくば歸りこむ忘れ得はてし八重の鹽風(國歌大觀載する所によれば第四句を「忘れな果そ」とせり)

の歌あり、また萬代集雜四に、「宋朝に入て侍ける日よみ侍ける」

とて戒覺上人の歌をのせ、その次に

これももろこしにてよめる(一本よみける)

慶政上人

思ひきや虎ふす野へと聞おきし唐國寒き旅ねせんとは
の歌の如きは、之を證して餘ありといふべし。

明惠上人が佛道に歸依すること、深く、延いて印度を慕ひ、ついに元久二年出遊の壯圖を企て、その行程、地理を研究するが如きに至りしことは、有名なる事實にして、能く慶政が記するところと合す、而して更に之を兩者相互の歌、例へば續古今集卷十六、哀傷歌の部に、月の夜高辨上人の許にまかりて、發心の始の事など互に申して侍けるに、身まかりて後、そのかみのものがたり思ひ出で、かの月日に當りける時よみ侍ける」とて、め

ぐり逢ふ昔がたりの秋の月なぐさめかぬる我が心かな」といへるが如き、その他新千載集釋教歌の中に載する歌の如きに鑒むれば、その交りの殊に深かりしを推すに足るべし、されば慶政が鎌倉時代の初葉に出て、山城松尾の法華山寺に居り、その當時の歌人及び高僧等と交りを重ね、自からも亦歌をよくし、壯時佛道研究の爲に入宋して、嘉定十年の頃彼土にあり、歸來文永五年の頃寂せし僧なるべしとは、上に記する所によりて知り得る所なりとす。

文書に記せる外國文字が、波斯文なるとは先きにいへるが如し、今之を音譯し、及び解釋すれば次の如し。

〔Iは文書上方の四行IIは下方の四行なり〕

I. Jehānē khurremi bā kas nemaned
 the world of joy with a man does not remain

Falek rozē dehēd roze setāned
 heaven one day gives one day takes back

Jehān rafteni est mā yadgar
 the world memory is we to depart

Bemerdam nemāned bejuz merdomi
 of man does not remain except noble deeds

II. Ger der ajalām mosāmuheh khuāhed bood
 if there granted time about my life may desire was

Roshen konem in deedeh bedeedare to zood
brightly may do this eye with the face of you soon

Laykin kheaf (ger) gerdad in (charkhe) kabood
but contradiction (if) may perform this (sky of) blue

Pidrood menam (ze to wa) to ze men pidrood
farewell I am (from you and) you from me farewell

即ち

1. The world of joy will last with no one for ever,
The Heaven gives (fortune) to-day, and takes (it) back to-morrow,
The world is a memory, and we are all to depart,

Nothing will remain of man besides his noble deeds.

II. If there be indulgence in regard to my life,

I shall brighten my eyes by looking on your face,

But if this blue (sky) were to turn against me,

You bid me farewell and I bid you the same.

括弧中の文字は意味を曉り易くせんがために挿入したるものにして原文にはなし。

II の中——を施せる *khelaf* は、原文には *khalef* と記せり、*khalef* は Richardson 氏の波英字書によれば、形容詞として「嬖を付けたる」名詞として「山路」駱駝の腋の下等の意なり、されどこれにては文を成さず、此は東京外國語學校教師バラカツラー氏の説に従ひ、*khelaf* 即ち「反對」の誤りと見んとす。

附記す、波斯文はアラビア文、トルコ文等の如く、右より始めて左に及び、順次下方に列を追ふものなること勿論なり、こゝに羅馬字を以て音譯せるものは、便宜に従ひて左より右に、即ち原文の書き方と反對の方向を辿れるものなり。

互ひに萬里異邦の客、偶々南海の舶上に邂逅して感慨極るなく、餘命を期して再會を希ふ、如何せん言辭通ぜず、離別の詞華は終に念佛の文字と解せらるゝに至れり。

所謂西南蠻夷と支那との早くより交通せるは、今更ためて説くの要を見ず、而して隋唐の頃七世紀の終迄に於る南方の航海事業は、殆んど波斯人の獨占とも稱するを得べく、法顯傳、南海寄歸傳、大唐西域求法高僧傳、鑑真和尚東征傳等を見れば能く其有様を知るを得べし、八世紀以降に至りては、波斯の滅

亡と共にアラビア人の東航期に移れりと雖、尙ほ波斯船の多かりしことは、アブルフェダ等の語る所にして、有名なる事實なりとす、されば宋代に至りては特に波斯の名を示さずと雖、宋史大食傳には新興の大食を以て、もと波斯の一部と記して舊來の波斯は此中に含まれたり、而して此等南人の來航して盛に市易せし有様は、唐末黃巢の亂時一度衰退せしと雖、宋に入りて太祖の開寶四年、廣州の市舶司を置きて以來、宋食貨志、文獻通考、咸平二年には抗州、明州に市舶廳を置き、天聖元年には之を司と改め、宋食貨志終に元祐(哲宗)の始には、此文書の書かれたる泉州(イブン、バツタ、アブルフェダ、マルコポロ、オドリク等の Zayton 或は Zaytun として傳ふる所なること、クラブロートの説けるが如し)及び密州(膠州)にも之を置けり、而して崇寧

(徽宗)の間には、他の市舶司は廢せられしも、獨り泉、廣の二州のみは、尙ほ之が中心として存在せり、南宋に至りても、尙ほ財源を得んが爲に、之が開市を繼續したりしが、文獻通考の記する所に従へば、宋朝の政策専ら利を獲んとするにありしより、嘉定の頃に至りては、年々至る所僅かに四五艘に止まれりと、然も此等の間に波斯人の伍せしことは、アブルフェダ等の記する所に従ふも固より疑ふ可きにあらず、慶政の逢ひし南蠻人なるものは、此等波斯人中の「兩三人」なりしならむ。

文書下方の左端に、「南番三寶名ハスツタラ(？)ホタラム」
「ク」と記せり、これその正否はともかく、南蠻人の名を聞きて記せしものならんか、さきに見たるが如く此文字を書きたるを波斯人とすれば、此名がサンスクリット風なるは暫く之を措

くとするも、ビクなる語が此當時の波斯人に付せらるゝは頗ぶる怪訝すべき處なりとす、もし果して之を書きたる人が眞個の比丘にして佛教徒ならば、其同宗徒なる慶政に贈るに、かかる波斯の詩を以てすることなかるべし、然も之を波斯人ならずとせば、何れの國人が此の如く波斯の詩を書し、剩さへ別辭の句をも波斯語を以てするものあらむや、思ふにこれ慶政がこれらの人を支那に南蠻人と稱するよりして、直ちに佛僧なりとして、其名の下に比丘と書したるものなるか、或はこれらの人が偶々波斯の僧侶なりしよりして、慶政が之を呼ぶに佛徒と同じくビクを以てせしに外ならざるべし、されどまたこれ南番人の名に非ずして、所謂南番にて三寶即ち佛、法、僧、を稱する語の誤傳なりと見るべきか、識者の教を乞はんとす、而

して慶政が此等の人を以て、印度(少くとも印度一帯の佛教國地方)の人と見たるは争ふ可らざる事實にして、もとより支那以外の西南の地には印度を中心とせる佛教國の存せるを知りしに過ぎざるが如し、これその南蠻文字といひつゝ、尙ほ且つその記述によれば辨和尚即ち明惠上人が印度の風を慕ふが故に之を送りしことを知り得るを以てなり。

(明治四十二年十月三十一日講演)

篇中慶政上人のことに關しては京都文科大學新村教授の教示によりて知り得たるもの多し、茲に記して謹んで感謝の意を表す。(四十三年三月二日記す)

四月上旬、恩師ムハメッド、バラカッターラー氏の來遊に接す、氏は印度の人、イラン語の造詣深く、目下東京外國語學校にて「ヒンドスタニ」語の教授を擔當せらる、則ちこの寫眞を示して教を請ひしに、第一の詩は波斯にては通俗のものにして、「シャー、ナーマ」波斯の史詩にして古代よりサラセンの侵入に至る迄の諸英雄を謳へるものなり(の中)にありと、よりにて Atkinson 氏の英譯 The Shah Namah につきて之を索めしも、同書の抄譯なるが爲か未だ之を見出すを得ず、されど彼の國にて通俗なるものなりといへば、此詩を書きし所以も能く曉るを得べく、また所謂南蠻人が波斯人なるべきとも疑がふべきに非るなり。(四月廿五日また記す)